

令和元年6月10日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K12672

研究課題名(和文)現代デザインの用語使用をめぐる社会的考察

研究課題名(英文)A Socio-cultural Consideration of Contemporary Design Terminology

研究代表者

高安 啓介(Takayasu, Keisuke)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：70346659

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：現代の主要な分野として、環境系・社会系・情報系のデザインの言説に注目した。デザイン教育制度における教育内容の変化、デザイン評価制度における評価対象の変化、近年のAIをめぐる議論、デザインジャーナリズム、デザイン辞典などを参照した。20世紀の後半にすでに製品から情報へという力点の変化が起こっており、モノからコトへの移行もかなり前から言われてきたが、21世紀にかけての大きな変化は、個物を作り上げるより、独立した個体どうしの関係を生み出すことに力点が置かれるとともに、生産・流通・消費・廃棄といった過程そのものを考察することに意義が見出されつつある現状をとらえた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はかなり大きな視野から現代のデザインの傾向をとらえようとした。私たちの現在の位置を知るためには、ここにいたるデザインの歴史をふまえる必要がある。課題解決をせまられるデザイン実践にとっては、今一度みずからの仕事について反省する材料になりうるし、デザインの歴史研究にとっては、今日の関心にもとづいた歴史への切り口を知ることにつながる。

研究成果の概要(英文)：The principal aim of this research was to investigate the shifting ideas of design practice by analysing the discourse regarding three contemporary fields: environmental design, social design and information design. In the course of the study, following points were examined: 1. disciplinary names of design education system, 2. current concern in design evaluation system, 3. current controversy about artificial intelligence, 4. design journalism and 5. design dictionary. This research complex has demonstrated that more weight has been put on creating the relationship between relatively independent objects than making individual products.

研究分野：美学・デザイン学

キーワード：デザイン 環境デザイン ソーシャルデザイン

1. 研究開始当初の背景

2015年の著書『近代デザインの美学』(みすず書房)において20世紀の近代デザインの鍵となってきた「近代」「造形」「構成」「形態」「空間」「表現」といった用語について検討をおこなった。そのねらいは、今日のデザイナーが意識しなくなった近代の諸前提をあらためて意識にもたらし、真に新しいデザインを構想する足がかりとすることだった。この続編に向けた研究として、現代デザインの鍵となる用語について検討を進めようとしている。

2. 研究の目的

本研究の目標は、現代日本におけるデザイン用語の使用をめぐる傾向をとらえ、デザインの言論のありかたを問うことである。デザイン活動はこれまでも社会の要求と直接つながってきたが、今日のデザインは社会関係それ自体をデザインするよう要請される場合もあり、そのことは、サービスデザインであったり、インクルーシヴデザインであったり、コミュニケーションデザインであったり、カタカナの呼び名にも現れている。本研究はこうしたデザイン概念の「社会化」と呼びうる傾向をとらえ、現代デザイン思想の理解のうえで昨今のカタカナ用語がどれほど有効であるかを問い直し、現代デザインの用語の使われかたの問題点を指摘する。本研究は、大学教育における必要から構想されたものである。本研究は、デザインの言論の基礎をなすところの用語への関心を喚起して、デザイン専門家どうしの相互理解を促進するだけでなく、専門家以外の人々がデザインの議論に参加しやすくなる条件をととのえる。同時にまた本研究は、現代のデザインの見取り図をしめすことで、一般の人びとが現代のデザインの課題を自覚しやすくする試みでもある。

3. 研究の方法

現代の主要な分野として、環境系・社会系・情報系のデザインの言説に注目した。デザイン教育制度における教育内容の変化、デザイン評価制度における評価対象の変化、近年の人工知能をめぐる議論、近年のデザイン辞典の項目、などを参照した。20世紀の後半にすでに製品から情報へという力点の変化が起こっており、モノからコトへの移行もかなり前から言われてきたが、21世紀にかけての大きな変化は、個物を作り上げるより、独立した個体どうしの関係を生み出すことに力点が置かれるとともに、生産・流通・消費・廃棄といった過程そのものを考案することに意義が見出されつつある現状をとらえた。

4. 研究成果

報告書として3月31日に雑誌『a+a 美学研究』において特集「デザイン新潮流」を組んだ。現代のデザインの動向について、8本の論文・用語解説・3本のエッセイを所収している。高

安はこのなかで論文 2 本「無装飾から超装飾へ」「人間の脳・機械の脳・環境の脳」および用語解説「社会デザイン」「批判デザイン」「思弁デザイン」「食のデザイン」を公表した。現在、デザインの語のもとで多様な実践が繰り広げられているが、本研究の考察をとおして、デザインの歴史において主流をなしてきた商業デザインにたいして、対抗デザインというべき潮流に着目して、現代の状況をとらえる視点を得た。対抗デザインには二つの系列がある。一方は、社会デザインの系列であり、社会において人々が直面する問題の解決を目指すのにたいして、他方は、批判デザインの系列であり、直面する問題の解決をいったん保留して、問題にたいする人々の関心をかきたて、公共の議論をうながそうとする。今日の科学技術に導かれたデザイン理解にたいして、社会実践の関心から二つの対抗軸に着目することで、新しいデザイン史記述の展望もひらかれた。

5. 主な発表論文等

5月20日に九州産業大学で開かれたデザイン関連学会シンポジウム「人工知能 × デザイン」において「人間の脳・機械の脳・環境の脳」と題する発表をおこなった。環境の概念をここでは関係の総体をとらえて、神経回路になぞらえて、人工知能の時代におけるデザイナーの役割について論じた。この発表の内容は、上記『a+a 美学研究』において「人間の脳・機械の脳・環境の脳」の題名のもとで公表した。

〔雑誌論文〕(計4件)

- 1 高安啓介、人間の脳・機械の脳・環境の脳、a+a 美学研究、査読無、13号、2019、106-119.
- 2 高安啓介、社会デザイン・批判デザイン・思弁デザイン、a+a 美学研究、査読無、13号、2019、132-142
- 3 高安啓介、無装飾から超装飾へ、a+a 美学研究、査読無、13号、2019、32-51.
- 4 高安啓介、現代社会における嗜好品のデザイン、嗜好品文化研究、査読無、4号、2019、4-12

〔学会発表〕(計7件)

- 1 高安啓介、デザイン史におけるバウハウスの位置、待兼山芸術学会、2019年3月30日、大阪大学
- 2 高安啓介、批判デザインから思弁デザインへ：ダン＆レイビーのイメージ使用をめくって、第14回 形象論研究会、2019年2月21日、神戸大学
- 3 高安啓介、社会デザインの文脈におけるモリスの位置、第3回 ウィリアム・モリス研究会 2018年12月15日、日本女子大学
- 4 TAKAYASU Keisuke, What is Good Design? Five Considerations for Design Assessment ICDHS 2018 Barcelona, 2018.10.30, Universitat de Barcelona
- 5 高安啓介、人間の脳・機械の脳・環境の脳、デザイン関連学会シンポジウム、2018年5月20日、九州産業大学
- 6 高安啓介、嗜好品のデザイン：過去・現在・未来、嗜好品文化研究会、2018年1月20日、京都ホテルオークラ
- 7 高安啓介、無装飾から超装飾へ、藝術学関連学会連合 第12回公開シンポジウム、2017年6月10日、神戸 KIITO

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。